

図書紹介

Istilah Ekonomi, Inggeris-Melayu-Inggeris. (Siri Istilah DBP Bil. 3.) Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka, 1965. 151 p.

マレーシア政府の教育省の中にある、言語文学局の経済用語専門委員会が編纂した経済用語集である。マレー語—英語、英語—マレー語の二部からなり、どちらの語からでも、対応する用語を見つけ出せるようになっている。この言語文学局では、すでに *Istilah Jawatan dan Jabatan* (役職・官庁用語)、および *Istilah Pentadbiran* (行政用語) とを出しており、経済用語集は第3番目にあたる。言語文学局は、マレーシアのマレー語化政策の推進母体で、マレー語がすべての分野で支障なく使用できるよう必要な新語を作ったり、種々の出版物を出している。

用語集の専門委員会は、マラヤ大学の経済学部長 Ungku Abdul Aziz 教授(早稲田大学経済学博士)を中心に、マラヤ大学のスタッフ、実務家など18人の構成員(1人の中国人を除いては、すべてマレー人)によって、丸4年の検討を経て完成されたものである。その苦心の一部は、編纂方針を述べた序文にもうかがえるが、並大抵ではなかったであろうことが容易に想像される。あるいは、外国語の音をそのまま写し、あるいは2語を1語に縮少し、あるいは従来の意味を拡張してマレー語を使い、あるいは接頭辞、接尾辞を基幹語につけて抽象化し、あるいは巷間に使われる口語を取り入れたりして、造語を計っている。特に、インドネシア語との連関を求めるということはない。

例えば、その序文にある新造語を使った一文を紹介すると、

Sa harus-nya dengan pengalaman yang telah di-dapati dan juga tegoran² dari *keritik*² [critics] yang mungkin di-terima, *daya pengeluaran* [productivity] JKIE (Jawatan-kuasa Istilah Ekonomi) harus boleh menunjohkan *pulangan bertambah-lebih* [increasing returns];

JKIE harus boleh menggubah bukan sahaja *kuantiti* [quantity] istilah yang *maksima* [maximum], tetapi juga menjaga supaya *kualiti* [quality] istilah² itu tidak jatuh. ([]内およびイタリックは引用者)

語数は、1221語のマレー語用語が基本となっている。読者の便をはかって、修飾語からも引けるようになっている。例えば、*tuan tanah tidor* (不在地主)は、*tanah tidor*, *tuan* か *tidor*, *tuan tanah* かでも引ける。(前田 成文)

Gerald C. Hickey. *Village in Vietnam.* New Haven: Yale University Press, 1964. xxiii+325 p.

昨今、ベトナムに関する文献が雨後の筍のごとくに現われているが、それらはほぼ(1)国際政治・国際関係の観点からベトナムを扱ったもの、(2)軍事的分析を中心にベトナム戦争を扱ったもの、(3)ジャーナリストによる報告、著述、そしてここに紹介するような(4)ベトナム社会自体を直接の分析対象としたもの、などに分けうるかと思う。この第4番目のカテゴリーに属する文献は、ある意味では最も重要なものでありながら、きわめて数少ないのが現状である。

この書は、ベトナムの一村落(Khan Hau, サイゴン南西 55km, 1958年当時人口3,241人)に関する民俗誌的な記録であり、筆者の理解する限りでは、同じ著者が、*The Study of a Vietnamese Rural Community: Sociology*, Saigon: Michigan State Univ., Vietnam Advisory Group, 1960. として出版したものを中心に、さらに何回かの追加調査を加えて完成したものである。

この書物の骨子を形成している諸資料は、1958年3月から1959年12月まで、文化人類学者の著者が、経済学者の J. Hendry, 政治学者の L. Woodruff とともに、ミシガン州立大学ベトナム顧問団支援のもとに、Khan Hau で行なった現地調査によって集められたものであり、巻末の文献目録にも見られる通り、他の2人の共同調査者も各々の専門分野でこの村落の調査報告を書いている。(J. Hendry, *The Study of a Vietnamese Rural Community* :

Economic Activities, Saigon: 1959; L. Woodruff, *The Study of a Vietnamese Rural Community: Administrative Activities*, 2 vols. Saigon: 1960.)

著者は、オリジナルのテキストに、他の2人の研究成果を加味して（生活様式と経済体系、村落行政と法律）、このメコンデルタにある一村落の全貌をミクロに描き上げようとしている。こうした、いわば息の長い研究は、動乱果てしない南ベトナムのような社会ではきわめて困難であって、序文を寄せたフランスのインドシナ研究の権威 Paul Mus が指摘しているように、今は古典となっている仏植民当時の研究成果との断絶を埋めるという意味でも、このモノグラフはきわめて貴重なものであると思われる。

内容は、結論の章をいれて全部で11章よりなり、(1)村の歴史、(2)地形と居住様式、(3)宗教と民間信仰、(4)血縁体系、(5)社会集団としての家族、(6)生活様式と経済体系、(7)村落行政と法律、(8)祭礼委員会、(9)社会経済的分化、(10)社会経済のプロフィールと社会移動、それに若干の附記がついている。各章とも、詳細を聞き取りおよび観察、短い歴史的説明、それに多数のケース・スタディを網羅してミクロな筆致が村落の生活を再現してゆく。専門項目が多岐にわたるために、もちろんここでは、その細目を紹介したり、評価したりすることはできないけれど、一つの小宇宙としてのこうした村落の生活全体のイメージを読者に伝えるという点では、この書物は、その希少価値というメリットを除いても、充分成功しているものであろう。

そこに描かれた村落住民の生活は、しかしながら、決して喜ばしいものではない。生活空間は狭く、技術が低いので生活は貧しく、人々は信心深い（というよりは迷信深い）。戦乱の絶えなかったこともあろうが、人々は村落レベルでさえ協同態勢を組織しえず、家父長家族と若干の信者グループ（カオダイ教の一派やマイノリティであるカトリック信者集団など）が成員の忠誠を吸収している。それは、例えば、家族単位の行事（冠婚葬祭や法事など）に全く家計とは不均衡な支出をするというような非合理的態度に現われたりする前近代的な生活なのである。

もしわれわれが一昔前の文化人類学者のように好奇心だけでこのような社会の問題を取り扱うことを

否定する立場に立つなら、この書物のもっている価値は、そうした意味での問題提起でさえあろう。望むらくは、本書のようなミクロな分析を全体社会レベルの諸研究（例えば、Nguyen Kien, *Le Sud-Vietnam depuis Dien-Bien-Phu*, 1963; Nghiem Dang, *Vietnam—Politics & Public Administration—1966* など）に繋いでゆく研究が輩出するように願うものである。

なお、一言不満を述べれば、煩雑であり、一般性もないので省かれたベトナム語（本文中の）の抑揚記号はつけておいてほしかった。（サイゴン出版のオリジナルでは、原語は正しく表記されている。）

（中野秀一郎）

陳孺性編「袖珍緬華辞典」ラングーン：イーセイ出版社、1963. 519 p.

ビルマ語の辞書は今までに各種各様のものが知られているが、1963年に新しく緬華辞典が公刊された。本書は題名にもあるように、12×9cmの小型(袖珍)版である。

編者は、これとは別に「綜合緬華大辞典」、「模範緬華大辞典」の二種を編纂している。前者は、Robert Shafer, *Bibliography of Sino-Tibetan Languages*. 1963. p. 7 に Sein, Chen Yee, *The Comprehensive Burmese-Chinese Dictionary, Mien-Hua Ta Tz'u-Tien*. Peking & Hongkong (at press), pp. ca. 2000 と紹介されているものであるが、鹿児島大学の荻原弘明助教授の書簡によれば、これは編者が15年かけてまとめたが未刊だとの事である。その abridged edition が「模範緬華大辞典」で、1962年に出版されたが早くも絶版になっており、駐ビルマ日本大使館の石堂事務官からの連絡によれば、ラングーン市内でさえも残念ながらもはや入手不能だという。

従来の各種ビルマ語辞典の内、内容的に最も充実しているのは、*Judson's Burmese English Dictionary*; revised & enlarged by R.C. Stevenson & F.H. Eveleth. Rangoon: 1953. p. 1061. であるが、袖珍辞典はページ数からいってもこのジャドソン辞典の半分、収録語彙数からいっても1/3足らずにすぎないとはいうものの、ジャドソン辞典に収録されていない単語や語句、ことに〈血液銀行〉〈水

爆>等の新しい単語が多数掲載されていること；綴字と発音とが合致しない特殊な発音を逐一指摘していること；従来の英緬辞書にはみられない意味の新規説明があること等、利用価値はきわめて高い。一方、文例がほとんどみられない；各単語に発音表記がない；文字の配列順序が従来の辞書（例えばジャドソン）とは異なっているばかりか、W. S. Cornyn & J. K. Musgrave, *Burmese Glossary*. New York: 1958. にも従っておらず、独特の配列形式をとっているため、従来の辞書を使い慣れた人にはかえって不便である等の難点がある。

編者は、現在 Burma Historical Commission のスタッフの一人で、漢籍史料を基にビルマ史を研究中の歴史学者である。発表した研究論文も少なくなく、特に *B. B. H. C.* に掲載された論文 “The Chinese Inscription at Pagan” (vol. I no. ii, 1960. pp. 153-157) は、サラブハ（鹿）門で発見された一面がピュー語、他面が漢語の未解読碑文をはじめて解読した論文として、その功績は高く評価されよう。（大野 徹）

Maung Ba Han. *The University English-Burmese Dictionary*. pt. I-X, Rangoon: Hanthawaddy Press, 1951-1966. 2292 p.

1962年の革命政権成立後、ビルマでは次々と新しい英緬辞典が刊行された。例えば *The Academy English-Burmese Illustrated Dictionary*. Rangoon: 1962. U Tin Tun, *The Concise English-Burmese: Burmese-English Dictionary*. Rangoon: 1964. *Khit Thit English Burmese Dictionary*. Rangoon: 1965. 等がそれである。

ところで、ここでとりあげたバハン博士編の英緬辞典は、1951年の第1部からはじまって1966年に第10部が完成した事からもわかるように、実に息の長い労作である。もちろん編者は多数の人、特にラングーン大学の U Wun, 女婿の U Tin Thein 等の協力の下に、この辞典を編纂したわけだが、これだけ丹念にまとめあげた英緬辞典は、U Tun Nyein, *The Students English Burmese Dictionary*, supplemented by U Tun Aung Gyaw. Rangoon: 1957. を凌駕するものといっても過言ではないと思われる。ただ難点をいえば、発音符号が全く附せら

れていない事で、在来の英緬辞典に残されていた課題の一つが未だ解決されていない点にある。対象言語の何語たるかを問わず、これからの辞書編纂には国際音声符号による発音表記が不可欠条件の一つである。

ともあれ、本書は、収録語彙の量はもちろんのこと、例文もふんだんにとり入れられており、英語を学ぶビルマ人にとって、有益なガイドの役目を果たす立派な辞典の一つだといえよう。

編者のバハン博士は、第二次世界大戦中、日本の軍政下において、ビルマ学芸院の辞書編纂部のスタッフをつとめた経歴をもつ人物である。

ビルマにおける辞典編纂の現状をうかがい知り得る一つの代表例として、本書を紹介したい。

（大野 徹）

Bo Taya. *Yebaw Thong-gyeit Pyidaw byan-gan*. Rangoon: Hkyobu-sabay, 1966. 227 p. (ボウ・ターヤー著『三十志士の凱旋』)

第2次世界大戦の勃発に伴って、反英独立を主張するドウ・バマーアシーアヨウン（別名タキン党）は官憲の弾圧によって地下活動を余儀なくされたが、党書記長のタキン・アウンサン（逮捕状が出ていた）は海路中国へ脱出、日本軍憲兵神田少佐の手引で東京に向かった。いったんひそかにビルマに帰ったアウンサンは、同志を募り「南機関」の下で軍事教練を受けビルマ独立軍を結成、日本軍のビルマ進撃と同時に、タイからビルマへ凱旋したことは、今日ではあまりにも有名な歴史的事実である。

このビルマ独立軍の母胎となったいわゆる「三十人の志士」達、およびビルマ独立軍に終始一貫援助指導を与えた大本営直属の「南機関」等に関する信頼すべき資料が、日本側の記録であることはいうまでもないが、反而ビルマ側の記録はさほど多くは知られていなかった。

本書は純粹の学術研究書ではないが、元「三十人の志士」の一人ボウ・ターヤーが、自己の体験を基にまとめた一種のドキュメンタリー文学として一読に値する。海南島に特設された陸軍士官学校での「三十人の志士」達の猛訓練ぶりから筆を説き起こし、バンコクでのビルマ独立軍の編成、3隊に分かれてのビルマ進撃、そしてついに著者の郷里ピンマ

ナーへ無事帰り着いたところで終わっている。チェンマイ出発後、タイの平地から山岳へ分け入り、うっそうと茂る森林地帯をかき分け、山腹に点在するカレン人村落をいくつも経て苦心惨憺の末、タイ・ビルマ国境を突破するくだりは、さすがに体験に基づいているだけに文章もイキイキとしていて、正に本書の圧巻だといってよい。

著者は、ボウ・ネーウィン（現ビルマ革命評議会議長ネーウィン将軍）の率いる第2班（ビルマ国内での後方攪乱担当）所属の将校で、アウンサン将軍が率いる作戦司令部（第3班）、ボウ・チャーゾー、ボウ・ジンヨー等の第1班（正規軍）のビルマ進撃に呼応して蜂起したわけである。

「三十人の志士」達は、ビルマ独立後バラバラになった。ボウ・レチャーのように実業界に入ったもの、ボウ・イェートゥッのように共産党に入党、地下活動に転じたもの、ボウ・アウンサンのように暗殺されたもの等、流動する歴史の重さをヒシヒシと感じさせられる。

本書は、「南機関」の長であった鈴木敬司元陸軍少将が直接著者から進呈され、同じ南機関の高橋八郎元大尉（現ビルマ大使館 Liaison Officer）の手を経て、私に邦訳を依頼してきたものであるが、ビルマ独立軍の活動を内面から描いたものとして貴重な資料であるところから、翻訳に先だちあえて紹介の筆を執った次第である。（大野 徹）

G.B. Milner and Eugénie J.A. Henderson (eds.) *Indo-Pacific Linguistic Studies*. Part I, Historical Linguistics (xv+514p.); Part II, Descriptive Linguistics (viii+571p.), Amsterdam: North-Holland Publishing Company, 1965.

1965年1月、ロンドン大学 SOAS の主催による Conference on Linguistic Problems of the Indo-Pacific Area がロンドンで開催されたが（泉井久之助「輓近南方諸言語研究の動向」『東南アジア研究』III-2. pp. 74-参照）、本書はそのときに提出された論文をまとめたものであって、同時に出版された雑誌 *Lingua* 14, 15 (1965) と同じ内容である。Part I には historical, comparative な論文

25編、Part II には descriptive, typological, sociological なもの24編が収められている。

言語系統別にみえていくと、ムンダ語については Biligiri の Sora 語動詞研究、Zide の Proto-Munda の再構などがある。モン・クメル語では Jacob のクメル語数表現の研究などがあるが、この系統の言語を比較言語学的に考察した本格的な論文はない。チベット・ビルマ語では、Rawang 語 (Morse)、ビルマ語 (Allot) の動詞表現の研究などもっばら文法に関するものが収められ、特殊なものとして Okell の Nissaya Burmese 研究がある。逆にタイ系言語に関する論文は4編とも比較研究である。

オーストロネシア語については従来の比較研究に対する批判を述べた論文が多い。古バリ語資料の評価 (Teeuw)、Rotuma 語における同系言語からの借用要素の問題 (Biggs) など。借用要素に関してはこのほかタガログ語におけるスペイン語要素を論じたもの (Lopez) がある。オーストラリアの言語にはわれわれは直接の関心をもたないが、Wurm によるオーストラリア語の研究動向の紹介2編は役に立つ。

以上のような historico-comparative または descriptive というオーソドックスな論文のほか、類型学的比較研究 (typology) と言語と社会を扱ったものが若干収録されている。いちおう系統から離れて音韻論的特徴などによる言語地域設定の試み (Henderson)、必ずしも新たな考えではないが概念が名詞的・動詞的のいずれかによる言語の分類 (Capell)、言語と方言 (Kähler)、national language の問題 (Alisjahbana) など。

参考のため執筆者名を列挙しておく。

Anceaux (Austronesian), Allot (Burmese), Alisjahbana (Malay), Biggs (Rotuman), Buse (Rarotongan), Biligiri (Sora), Chrétien (Austronesian), Cowan (Oirata), Condominas (Mnong Gar), Constantino (Philippine), Capell (Australian), Dyen (Formosan), Elbert (Polynesian), Egerod (Atayal), Gedney (Yay), Haudricourt (Oceanic), Henderson 2編 (Khasi; SEA languages), HlaPe (Burmese), Holmer (Austronesian), Izui (Micronesian), Jones

(Thai), Jacob (Khmer), Johns (Javanese), Kuiper (Munda), Kähler (Indonesian), Luce (Danaw), Li (Kam-Sui), Lopez 2 編 (Tagalog; Philippine languages), Milke (New Guinea), Milner (Austronesian), Morse (Rawang), Nguyen-Dinh-Hoa (Vietnamese), Okell (Burmese), Pinnow (Munda), Pulleyblank (Sino-Tibetan), Roolvink (Malay), Robins (Sundanese), Shorto (Mon), Simmonds (Tai), Teeuw (Old Balinese), Thompson (Vietnamese), Uhlenbeck (Javanese), Wurm 2 編 (Australian), Zide (Munda).

(三谷 恭之)

“Thai Nooi” (pseud.) *Prasopkaan 34 pii heeng raboob prachaathipatai*. Bangkok: Prae Pittaya, 1965. 664 p.

匿名の政治評論家「タイ・ノイー」の筆はいつになったら衰えるのか。かれの著作の数は、もう30冊になるはずだ。人民党革命の直後から、新聞編集のかたわら、政治評論の仕事をつづけ、主として Prae Pittaya 書店を発行元に、精力的に書きまくってきている。かれの生命力が長いことは、二つのことを物語る。一つは、民衆がかれの評論を支持していることである。もう一つは、「タイ・ノイー」自身が政治の観察と政治評論の仕事に、心から情熱を燃やしていることである。しかし、かれの本名を知っていることはあまり多くはない。それでいいのだと思う。

本書は、その「タイ・ノイー」の最新の本である。題の意味は、民主主義時代の34年の経験と訳せよう。人民党革命後の歴史、すなわちタイの現代史を、「タイ・ノイー」なりに捉えた本だとすると、それだけで読者の興味をひくことだろう。それともう一つ、もうそろそろタイ人の手になるそのような民主主義時代史が噴出していい頃だから、その先鞭をつける意味でも、本書の刊行は意味深い。

しかし、残念ながら、ある面では、読者は期待を裏切られることだろう。なぜなら、これは、実はかならずしも首尾一貫した歴史の本ではないからだ。この34年のあいだの重要なできごとを、エピソード的に取り上げて解説しているだけの本である。内容の迫力も、かつての力作「10人の総理大臣」にはる

かに及ばない。そして、やはり、サリットの評価はまだ遠慮しているのでは、興味が半減する。

本書は、それでもいくつかのメリットをもっている。第1のメリットは、フラー・ソン・スラデートの再評価をうながしている点である。ソンは、ピブーンに憎まれた悲運の政治家である。ピブーンによってたいへん悪いイメージを作り上げられてきた。かれがはたして、ピブーンがいうほど悪人であったか、そして、人民党内序列第2位という実力、人民党革命の作戦担当者としての功績などは、改めて高く評価されねばならないのではないか。ピブーン研究の反面に見逃せない人物だけに、本書が、ソンの人となりを描きだすためにかなりのページを割いているのは貴重である。

第2のメリットは、自由タイの正確な評価を試みている点である。自由タイは、たくさんの系列にわかれた地下運動であり、ややもすると、自由タイ運動の全貌が捉えられない傾きにあった。とくに、ネート・ケーマヨティンが自伝風に自由タイ運動を描いてよく読まれたために、かれの描く自由タイ像がすべてと解される傾向も強い。本書が、X-O グループという集団に着目し、チャムカッドという人物の動きを自由タイの中心的系列として追っているのは、その点注目されねばならない。もっともこの点は、タイでは、しだいに常識化しているが、攷米のタイ研究は、まだよく掴んでいない点である。

このような問題提起に接すると、「タイ・ノイー」がタイ政治史の生き字引といわれる事実の正しさをまざまざと感じさせられる。冒頭の、人民党革命が民主化のトレーガーとしては失敗だったということから話を始める芸当も、ただものではできないことだ。一読してけっして損はない本である。

(矢野 暢)

Guy Hunter. *South-East Asia: Race, Culture & Nation*. London: Oxford University Press, 1966. xix+190 p.

本書は、ロンドンの Institute of Race Relations があたらしくはじめた世界民族問題研究シリーズの第1弾である。著者の Guy Hunter は、イギリスでは、アフリカ問題の権威として知られているが、

東南アジアにも半年ほど滞在した経験があるようだ。

とにかくいい本だ。まず、このシリーズの企画自体を高く評価したい。むつかしい理論を前提に新興諸国の問題にアプローチするのではなく、なるべく常識的な感覚で国家の問題を考えようとする姿勢は健全である。最近こんなに興味深い新興国家論を読んだことはない。このシリーズは、このあと、南米、トリニダード、カリブ海諸国、ブラジル、南アジアと舞台を移すという。楽しみである。

本書の内容は、三つの部分にわかれている。第1部では、東南アジアの文化と人種構成が概括されている。第2部では、現在の国家像をつくりあげた後天的要因、たとえば歴史経験、政治行政、教育などの局面が検討される。第3部では、現代における問題点がひとつおりの議論され、157ページからはじまる結論部は味わい深いものである。

著者の東南アジアでの経験は少ないが、この本の内容をみると、一級の専門家であることがわかる。それというのも、かれがイギリス人であり、イギリス人のすぐれた学者がみなもっているすぐれた現実感覚をもっているからだろう。無駄な理屈をこねない英国流の堅実な学風が、本書に安定した生命感を与えている。本書は、一行一行が味わいをもち、それだけに読むのが難しい本でもある。随所どころがなげない断定が、一つ一つ問題をもっている。

新興諸国の政治については、アメリカの学者がむつかしい理論的研究を続けてきているが、かれらの才気走った理論に食傷したときに、このような本を読むとせいせいする。イギリス人学者の書いたこのような本には、学問の正しいあり方を暗示するなにかが秘められている。アメリカ流の社会科学は、論理的に突きつめるとどこまで行きつくのかわからない点に、不安を感じさせる。しかし、イギリス流の社会科学は、どこまで行っても、けっして不毛の非人間的な究極には行きはしないという保証がある感じで、やすらぎを覚えるから不思議だ。しかし、この点はだいたいなことだと思ふ。

わたくしは、一読して、この本をたんなる民族問題の本だとは思えなかった。その枠を越えて、むしろ新興諸国の本質に問題点、すなわち、国民国家形成の問題とナショナリズムの問題を主題にしている感じだ。新興諸国のナショナリズムについて書かれ

た本はこれまで何冊かあったが、社会学的に、生きた現実のダイナミズムとしてのナショナリズムの生成要因を扱った、実証的な研究に乏しかったように思える。そのためには、ナショナリズムの理念史的研究ではなくて、Karl Deutsch が提案した“social communication” 概念ととりくまねばならない。この本は、あいまいな形ではあれ、そのような問題意識に立っていると思う。もっともイギリス人の常識といってしまうとそれまでだが、アメリカの学者に欠けているなにかを Hunter が示していることは事実だ。それをわたくしは、たいへん貴重に思うのだ。(矢野 暢)

Hugh Tinker. *Reorientations, Studies on Asia in Transition*. London: Pall Mall Press, 1965. 175 p.

ビルマの専門家として名高い著者の最初の評論集である。いつもの密度の高い研究書と趣きが違い、軽く読める本になっている。それでいて、本書を読んで学ぶ事柄はけっして少なくはない。一つ一つの論文が、それぞれ南アジア、東南アジアのだいたいな問題を扱っているのだから、全体としてままとすると、アジア問題の貴重な参考書になっている。それよりもまず、かれのこれまでの本ではなかなかつかめない Tinker のアジア観がはっきりわかるのはうれしい。かれはすばらしい政治感覚の持ち主のようだ。

全部で10編の論文が収められている。第1の論文“History in a Time of Transition”では、西欧の歴史学者とアジアの歴史学者とが「意見を異にする協定」を結べと提案している。第2の論文“The City in Asia”では、アジアの後進地域において都市が果たす役割が扱われている。都市の機能を政治学の研究課題にせよと提案し、同時に、東南アジアの都市が、社会機能を独占しすぎるのはよくないといっている。第3の論文“Community Development, A New Philosopher's Stone”では、地域開発という事柄がアジアでは魔術のような魅力をもつ事実が指摘される。これは、欧米の歴史に先例のない面白い実験だが、民衆の自発性を抑圧する傾向にあるのはよくないと断じている。第4の論文“Climacteric in Asia”では、40年代、50年代そ

して60年代のアジアの時代像を問題にし、将来に希望を見出そうと努力している。第5の論文“India Today”は、インドがいま“in making”なのか、in breaking”なのかを問題にする。その解答を、インド学者の文献のなかに求めようとするが、解答は得られない。第6の論文“The Name and Nature of Foreign Aid”は、外国援助を外交史上の新しい現象とみなし、これのもたらす効果や問題点を扱おうとする。しかし、表面をなでるだけに終わっている。ただ、外国援助の一環としてやってくる技術専門家が、エアコンのある立派な家に住むとどうということになるか、かれらはどうして短期間の旅行だけで帰って行くか、などのシニックなアプローチが効果的である。第7の論文“Broken-Backed States”では、「東南アジアの国々は、西欧の国々なら国家の危機の原因になるインフレや革命などが危機にはならない。なぜなら社会がルースだからだ。」という命題を提出している。東南アジアの国家の強みは、“survival”できるところにあるという。第8の論文“Race, Nationalism and Communalism in Asia”では、こと民族対立の問題に関する限り、欧米とアジアとで、問題の性質は同じである、という判断がなされている。

以下ははぶこう。しかし、このように、どの一つをとっても、着目点が卓抜で、解答もまた明快である。アジア問題についての一般の評論集として推薦したい。Tinker の評論は、今後マークしなくてはならないようだ。(矢野 暢)

William Marsden. *The History of Sumatra*. A reprint of the third edition introduced by John Bastin. Kuala Lumpur: 1966. x + viii + 488 p.

著者は1754年にアイルランドで生まれた。兄 John Marsden が英国東印度会社の西部スマトラ駐在官を勤めていたので、Port Marlborough の書記官に任命され、1771年5月にベンクーレン（南部スマトラ西海岸の市で、会社の香料貿易の根拠地）へ赴き、1779年7月にスマトラを去った。この間の調査・収集材料、職務上得た資料をもとに兄や友人からの情報をとり入れて、1783年にこの本の初版を

出した。その後新しい資料を得て改訂増補し、1811年にその3版を出したが、この本はそれを覆刻したもので、第3版に新しく加えられたスマトラ島の珍しい動植物や当時の景観の図版26葉が巻末に収められ、John Bastin の紹介が附された。第3版が稀覯書になっている現在、今度の覆刻は非常に喜ばしい。

本書の記述内容はそのフルタイトルが端的に示している。*The History of Sumatra, Containing an Account of the Government, Laws, Customs, and Manners of the Native Inhabitants, with a Description of the Natural Productions, and a Relation of the Ancient Political State of that Island.*

すなわち本書は「スマトラ誌」と称すべきもので、Raffles の「ジャワ史」、Crawfurd の「インド群島史」と並んで、英人の手になるインドネシア研究の古典とされている。

ところで著者の採った方針は、自分の見聞範囲内でスマトラ全体を概括的に記述し、同島を個々の地域、種々の居住民に分けて各々を詳論するよりも、むしろ同島の標準タイプともいうべき地域・原住民を取り挙げて、歴史・社会・法制・風俗・宗教の各面から包括的に観ることにあった。著者の標準選定は、今日の進歩した民族・社会学から見れば妥当性を欠くようだが、その記述は正確である。なおヨーロッパ勢力のこの島との接触、およびその植民過程・支配体制それに通商状況はあまり触れられていない。ただ近世以来ヨーロッパ勢力と交渉を頻繁にもったアチェーの16世紀以後の歴史が概観されており、注目される。

この本は初版以来目次も章別もなく、23群（旧版では21群）の見出し語の下に各々独立した叙述が成されているので、いささか不便である。また本書が記された当時は、スマトラ島の大部分および西部沿岸島嶼がまだ十分に調査されておらず、観察技術も整っていなかったため、今日から見れば物足りない点も多い。しかし本書がインドネシアの民族誌・言語・慣習法の研究上、先駆的役割を果たしたことは周知の事実である。ちなみに著者にはマライ語文法・マライ語辞典の2名著がある。

(中島慎二郎)